

山城萱葺「茅の庇一ひさし」

ミニサイズで上品な空間演出

日本の原風景の代名詞、茅葺き屋根の民家が減少する中、茅葺き屋根の工事などを手掛ける「山城萱葺」が今年2月に発売した、建物に茅葺きを部分的に取り付ける「茅の庇一ひさし」が話題を集めている。門や室内の一部に手軽に設置可能で、原料となるイネ科の植物ヨシが群生する河川の環境保全にもつながるといふ。

山城茅葺は、戦前から宇治川に生えていたヨシを採取し、業者に販売していたのが始まり。現在の5代目社長、山田雅史氏が法人化した。ヨシは茅葺きのほか、紙などの原料としても使用される。同社は現在、茅葺き

屋根の工事も手掛ける。

茅葺きは、乾燥させたヨシを屋根に隙間なく敷き詰める。日本では戦前まで農村地域を中心に広く普及していた。しかし戦後、瓦の普及や、火災時の外壁の延焼につながる素材の使用を制限する法規制などにより、次々と姿を消した。

ヨシには水中の窒素やリンを吸収し、水を浄化する作用があるが、茅葺き屋根の減少で刈り取られないまま放置されるヨシが増え、近年は腐敗したヨシが川の水を汚すなど環境問題になっている。

茅葺き屋根は、世界遺産に登録されている岐阜県白川村の集

落や、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている京都府南丹市美山町などを例外として、大半は住人の高齢化や維持管理費の負担などを理由に取り壊しや建て替えが進んでいる。

こうした状況を憂慮した同社では、庇や室内などに取り付けられるミニサイズの茅葺き屋根を発案し、「茅の庇一ひさし」を開発。茅葺き屋根らしい特徴を凝縮したデザインに仕上げた。遠くは埼玉県でも採用されるなど、全国から問い合わせが寄せられており、反響は大きい。値段は設置場所や大きさなどで異なる。

開発を担当した社員の中森千



茅葺き屋根をデザインした山城萱葺の「茅の庇一ひさし」 京都府城陽市

尋さんは10年前、アルバイトで働いた建設現場で青空の下、小麦色に輝く美しい茅葺き屋根に魅了され、茅葺き職人として修業を始めたといい、「質感や空気感が魅力。日本ので上品な印象や、ほっこりできる空間づくりなどに最適だ」と話す。

(栗井裕美子)

■企業情報

- ▷ 本社＝京都府城陽市寺田 中大小100
- ▷ 設立＝2014年7月
- ▷ 資本金＝700万円
- ▷ 従業員＝10人
- ▷ 事業内容＝茅葺き屋根の工事、ヨシの販売など